



CONTENTS

1 公開授業と意見交換会 1

1.1 公開授業 1

1.1.1 対象科目と実施期間 1

1.1.2 実施目的 1

1.2 意見交換会 2

1.3 公開授業を終えて 3

「簿記論」 高橋 泰代 (総合経営学部経営学科 特任教授) 3

「地誌学」 西岡 尚也 (公共学部公共学科 嘱託教授) 9

「貿易論」 柴田 鎮毅 (経済学部経済学科 講師) 12

「経営情報処理論 A-I」 小林 俊和 (公共学部公共学科 講師) 15

「商法 (商取引法 I)」 荒井 太郎 (総合経営学部商学科 特任教授) 18

「一般経済史 I」 伊藤 敏雄 (経済学部経済学科 准教授) 21

「経営学概論 I」 深沼 光 (総合経営学部経営学科 教授) 24

「経営管理論 I」 浅井 希和子 (総合経営学部経営学科 助教) 26

2 授業アンケート 30

2.1 実施方法 30

2.2 対象科目 30

2.3 質問項目 30

2.4 教員からのフィードバック 30

2.5 集計結果の開示方法 30

3 大学院 FD 活動 32

「『2024 年度修士論文中間報告会』開催される」

 宍戸 邦章 (大学院地域政策学研究科 教授) 32

1 公開授業と意見交換会

1.1 公開授業

1.1.1 対象科目と実施期間

今年度の公開授業は、前期授業期間の第11週にあたる2024年6月24日（月）～28日（金）に行われた。今回対象となった8つの授業科目名と担当教員名、開講日時、教室は下表のとおりである。これらの対象科目は、今年度着任した新任教員の担当科目のほか、授業内容や受講者数などを勘案し選出された。

<公開授業の対象科目>

月日	時限	科目名	担当教員	教室
6月24日（月）	2	簿記論	高橋 泰代 (総合経営学部経営学科 特任教授)	424
6月25日（火）	2	地誌学	西岡 尚也 (公共学部公共学科 嘱託教授)	622
	5	貿易論	柴田 鎮毅 (経済学部経済学科 講師)	951
6月26日（水）	1	経営情報処理論 A-I	小林 俊和 (公共学部公共学科 講師)	412
	1	商法（商取引法 I）	荒井 太郎 (総合経営学部商学科 特任教授)	432
	2	一般経済史 I	伊藤 敏雄 (経済学部経済学科 准教授)	632
6月27日（木）	2	経営学概論 I	深沼 光 (総合経営学部経営学科 教授)	432
6月28日（金）	1	経営管理論 I	浅井 希和子 (総合経営学部経営学科 助教)	411

公開授業の実施については、6月5日（水）開催の教授会においてFD委員会委員長の宍戸邦章教授よりアナウンスが行なわれ、各教員に参観が呼びかけられた。

1.1.2 実施目的

公開授業を行う目的は、参観した教員が授業運営方法や工夫について新たな知見を得ることに加えて、公開授業を担当した教員と感想やコメントなど意見交換を行い、その結果を互いの授業運営に活かしていくことにある。このため、各授業では参観した教員を対象に、興味深い点や参考になる点などを自由記述形式で回答するアンケートが実施された。さらに、公開授業を担当した教員と参観した教員が参加し、対面式で意見を交わす意見交換会が後日開催された。

1.2 意見交換会

公開授業に関する意見交換会は、本学におけるFD研修として実施されている。今年度は、2024年7月10日（水）16:30～17:30に本館6階研修室において、本学の教職員18名が参加して行われた。会次第は以下のとおりである。

<会次第>

1. 開会挨拶（FD委員会委員長 宍戸邦章教授）
2. 公開授業担当教員による公開授業に関する報告と参観教員による感想や意見の交換
3. 総括と閉会挨拶（FD委員会委員長 宍戸邦章教授）

公開授業検討ワーキングの森田学教授による司会進行のもと、まず科目ごとに公開授業を参観した教員の代表1名が感想やコメントを述べ、次にその授業を担当した教員が授業運営上の工夫や苦心している点を報告し、参観した教員の質問やコメントに答える、という形で会は行われた。下の写真は意見交換会の様子であるが、参加者間で有意義かつ建設的な意見交換が行われた。

<意見交換会の様子>



1.3 公開授業を終えて

今回、公開授業を担当した8名の教員には、意見交換会で報告した授業運営における工夫や苦心、公開授業を終えた感想、アンケートや意見交換会で出たコメントに対する回答などを文章の形でまとめてもらった。以下では、公開授業の開講日時順に、その文章と公開授業時の写真を掲載している。



「簿記論」

高橋 泰代

(総合経営学部経営学科 特任教授)

1 はじめに

2024年4月より大阪商業大学総合経営学部に着任いたしました。担当は「簿記論」「財務諸表の基礎」「コンピュータ会計処理論」「マネジメント・ゲーム」「ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ」です。

私は2003年から非常勤講師として大阪商業大学に出講し、「財務会計」関連の授業を担当しておりました。非常勤講師ですから学生と関わるのは週1日で、特に質問等がなければ授業が終わるとすぐに本務校に戻るか帰宅いたしておりました。もちろん非常勤講師であれ専任教員であれ、授業に対する考え方が変わるわけではありませんが、専任教員になり、学生とコミュニケーションをとる時間が増えたことは嬉しく思います。さらに、専任教員になったことで、毎年変化する学生の気質やクラスの雰囲気に応じて、授業の内容や進め方にアレンジを加えやすくなりました。

現在ではあたりまえのことになっていますが、FDという言葉が出現し、あらゆる大学で授業アンケート、研修会、授業見学等の様々な取り組みが行われるようになりました。当初は教員にも戸惑いがあり、特に授業評価なるものに対して少なからずの抵抗感があったことを思い出します。前職でも公開授業は毎年経験しておりましたが、今年は本学での初めての公開授業ということで、とても緊張いたしました。

先生方には、月曜2限というご多忙な中、公開授業にご参加いただきありがとうございました。また、意見交換会では貴重なご意見や他の先生方の授業への取り組み等をお聞かせいただきました。これからの授業運営の参考にさせていただきたいと思っております。この場を借りて御礼申し上げます。

2 授業の概要

公開授業の「簿記論」につきまして、授業の概要をご説明いたします。授業の進め方(構成)は、原則として以下のとおりに行っております。

- ① 前回授業の振り返り(復習)
- ② シラバスに即した授業内容(必要に応じて内容調整)
- ③ 問題解答
- ④ 解答解説
- ⑤ 課題説明
- ⑥ 次回授業の予告

「簿記論」の授業では、日商簿記検定3級のテキストと問題集を学生に必携させ、テキストの内容を説明した後に例題を解くことを繰り返します。授業内で基本的な問題を解答する時間を設け、解答の解説を行います。時間があれば問題集の基本問題も解答させます。高校ですでに学んでいる学生や問題を解答するのが早い学生もいますが、時間内に解けなかった問題は次週までの課題（宿題）とします。

授業ではテキストと問題集を使用しますので、授業資料は manaba では特に配信していません。授業では、テキストと問題集の内容を書画カメラで投影して説明し、補足項目は板書によって説明します。

検定用教材は使っていますが、必ず会計情報と簿記の関連性について学術的な説明を加えます。必要な場合はパワーポイント資料を使用します。授業前に資料を配信するとノートを取らなくなることを懸念して、授業後に配信するようにしています。また、欠席学生や学生からのリクエストがある時には、授業動画を manaba で配信します。

公開授業では、ちょうど基本的な簿記の一巡（複式簿記による取引の仕訳から決算までの一連の手続き）が終了し、会計情報の意義についての授業内容となりました。つまり、「簿記をなぜ学ぶのか」「会計情報とは何か」について、これまでの論点を整理した内容でした。

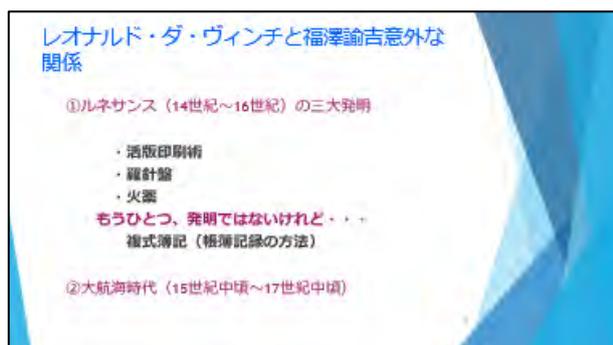
3 授業の工夫

ある有名シェフが「自分が苦手な食材をいかに美味しくできるか、を心がけて料理を考えています」とインタビューに答えておられましたが、これは私の授業に対する考え方と似ています。

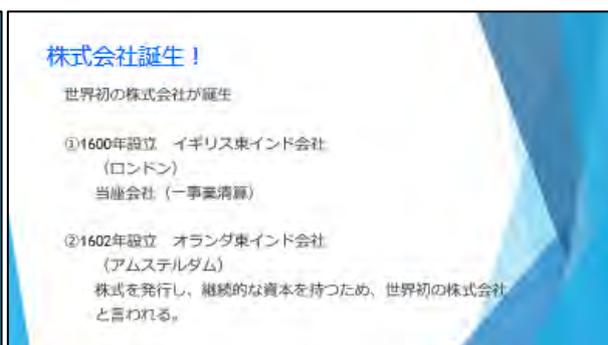
私自身、大学生時代にとっても苦手な授業がありました。私が苦手だから学生も苦手だと決めつけてはいませんが、正直に言いますと、私にとって簿記はとんでも苦手な科目でした。まず、「借方」「貸方」でつまづきます。「貸付金なのに借方？」「借入金なのに貸方？」これが混乱の始まりです。複式簿記生成の歴史を学べばその理由は理解できるのですが、簿記は1年次配当が多く、会計史などを学んでいません。そのため、ここでつまづきやすくなり、それをきっかけに「簿記嫌い」が始まります。

そこでルネサンスから大航海時代、少し進んで産業革命と、株式会社の発展とパラレルに発展していく会計の概念をパワーポイントで物語（紙芝居）風に説明します。下の授業スライド1と2は授業で使用したパワーポイント資料です。それぞれ複式簿記が登場した歴史的背景と株式会社の誕生に関するもので、ルネサンスから大航海時代に株式会社の萌芽が見られ、信用取引とともに複式簿記が発案され生成されていく過程を説明しています。

授業スライド1 ルネッサンスと複式簿記



授業スライド2 株式会社の誕生





「借方」「貸方」以外にも初心者がつまづく項目がありますが、私が大学生だった当時を思い出し、どうすれば理解できるのか、様々に工夫をしています。「苦手な内容をいかに興味を持てるように説明するか」。これを常に考えて授業を構成し、授業中は教室内を巡回して学生の理解度や進捗を直接確認しています。また、授業後には時間の許す限り、学生と雑談をしながら授業についての感想を聞いています。雑談とはいえ、学生から

教えられることも多くあり、次回の授業のヒントが得られることもあります。

4 意見交換会での質問とコメント

4.1 公開授業の内容

公開授業では、「企業の会計情報の意義」を中心に説明しました。「会計＝お金のことを扱う」ではないことを学生に理解して欲しい、というのが会計学を専門とする私の願いです。会計は企業情報の一部ですが、この情報が金額で表されることに誤解があります。会計は「経済社会のインフラ」と言われるように、あまり派手に表に出てくるものではありません。私たちは日頃「電柱」や「ガス管」、「水道管」には注目して歩いていませんが、これらがライフラインと言われるように、会計も企業のライフラインなのです。そして企業が発信した重要な情報をキャッチし、それを解説する能力を養成することが会計学担当者である私の責務ではないかと考えています。

4.2 授業に関する情報収集

学生に身近な会計情報に興味を持ってもらうことが、会計学を学ぶ第1歩になります。そのために何を例示すれば良いか、常に情報を集めています。「どのようにして授業のネタ探しをするのか」との質問をお受けいたしました。回答になるかどうかわかりませんが、時間があれば学生と同じようにスマホやテレビで情報を集めています。インスタやX、ブログなど、流行りのものの中でも会計や経営に関連するネタ探しをしています。

4.3 他の授業科目との関連性

「関連分野の他の授業との接続についてどう考えているのか」とのご質問について、会計は企業情報の1つですから、企業にかかわる科目のほとんどと関連があると考えています。学生には、私が説明できる範囲で、授業で取り上げる項目が他の科目と関連することを説明しています。例えば、全体的な業績が悪い場合、企業はどのようにして業績を回復すべきかを考えますが、これは経営戦略関連科目を学ぶことが必要であり、売上総利益が悪い場合は製品・商品力を向上させるためのマーケティング関連科目を学ぶことが必要であると説明しています。また、企業買収や合併などについては、資金調達やM&Aに関係する科目を学べばより専門的な知識が得られると説明しています。「簿記論」は1年次配当ですので、他の科目や会計のアドバンス科目に興味を持つことで、2

年次以降、目的を持って履修できるのではないかと期待しています。

4.4 授業構成

公開授業については、「授業の組み立ては展開、資料ともわかりやすかった」とお褒めのコメントもいただきました。公開授業当日の授業構成は下記の1～7のようになっています。また、授業で使用した授業スライド18枚のうち、主要なものを5枚（授業スライド3～7）を次頁以降に掲載しています。



<授業構成>

- 1) 基本的な簿記の複式簿記による取引の仕訳から決算までの一連の手続き)の復習
- 2) 決算で作成される資料（いわゆる財務諸表）の説明 [授業スライド3・4参照]
- 3) 会計情報の身近な事例：大学祭の模擬店 [授業スライド5参照]
- 4) 桃太郎電鉄（桃鉄）で考える利益 [授業スライド6参照]
 - ・ 社長（桃太郎電鉄の設定）が利益を得るための戦略をゲームで説明
 - ・ なぜ桃太郎電鉄を選んだのかをコナミグループ株式会社の「桃太郎電鉄教育版 紹介ビデオ」（5分程度）を視聴して説明
 - ・ 利益を得るための戦略として「レッドクイーン効果」などマーケティングについて説明（これは、会計学から派生して大学の他の関連授業への誘導が目的）
- 5) 桃太郎電鉄を発売している企業「株式会社コナミデジタルエンタテインメント」について [授業スライド7参照]
 - ・ 「株式会社コナミデジタルエンタテインメント」は「コナミグループ株式会社」の子会社であることを説明
 - ・ それぞれのホームページからコナミグループ株式会社の概要を説明
 - ・ 連結会計の考え方へ誘導
- 6) サザエさん一家（2世帯家族）を例示して連結会計について説明
 - ・ 会計のアドバンス科目へ誘導
- 7) 次回授業の予告

この回の授業では、会計学など数字を扱う科目への苦手意識を払拭させること、会計学から関連して様々な経営学の分野への興味やカリキュラムツリーを意識すること、をメッセージとしました。

第15回の最終授業では、オンデマンドで配信されている企業の株主総会を視聴して、実際に会計情報がどのように説明されているかを実感し、将来の就職活動に役立つことを併せて説明しました。

授業スライド 3 会計情報の意義①

損益計算書と貸借対照表①

1,000,000円の自動車を買いたい！

A君 頭金(自己資金) 300,000円 自動車ローン 700,000円		B君 頭金(自己資金) 700,000円 自動車ローン 300,000円
--	---	--

この状況を同じ自動車を買いたいA君とB君の財政状態といいます。

でも、これだけでは、情報不足なのです。

授業スライド 4 会計情報の意義②

損益計算書と貸借対照表②

A君 頭金(自己資金) 300,000円 自動車ローン 700,000円		B君 頭金(自己資金) 700,000円 自動車ローン 300,000円
--	---	--

自動車ローンは1年で返済できる！

自動車ローンは3年かかって返済

でも、ローンの返済日に二人とも計画通りにおカネを準備できるのか

A君とB君を財務情報から比較するのですが、貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書などの会計情報により、どちらが優位か、総合的に判断しなければならないことを説明しました。

授業スライド 5 大学祭終了後の説明会

大学祭の模擬店⑤

実行委員は、大学祭が終わって、みんなが納得するもうけの分配を説明しなければなりません。

最初に、報告する内容を確認します。

- ①販売価格
- ②販売個数
- ③売上
- ④レンタル料、材料費などの経費
- ⑤もうけ

次に、収入と支出に関する資料を作成し、配布します。

この資料に基づいて報告したら、みんな納得してくれました。

これこそが、「説明責任」、会計の役割なのです。

「大学祭の模擬店の事例により具体的なイメージがしやすい」とのコメントをいただきました。

会計(accounting)と説明責任(accountability)の関係性を示すために、大学祭が終了してから会計報告をすることの重要性について説明しました。模擬店で得られた収益の説明に加えて、利益の分配についてゼミナールのメンバーが納得してもらうような資料が必要であること。これは株主総会で説明されることも同様であること。その説明資料を作成するツールとして「複式簿記」が採用されていることを理解すれば、簿記を学び、会計学へと繋がって行くのではないかと考えています。

授業スライド 6 桃鉄で最大の利益を生む

桃鉄で学ぶ資産(貸借対照表)と収益(損益計算書)④

以下の選択肢の場合、どの物件を購入しますか？

【自分の資産: 2億円】

C物件	価格	収益率
A	1,000万円	100%
B	5,000万円	50%
C	10,000万円	30%

ゲームの中で、学生に収益率から物件を選んでももらいました。「選ぶ」という言葉に誘導されたのか、1つしか選択していませんでした。自己資産が2億円あるので、A、B、Cのすべての物件を選ぶこともできたのです。

授業スライド7 コナミグループについて



コナミグループ株式会社を紹介しました。コナミグループ株式会社は子会社が少なく、説明するには良い事例となりました。

5 その他、授業環境など

初回授業の授業ガイダンスで、静粛な授業環境を保つように注意喚起しています。毎回の授業でも注意喚起はしますが、今年度の1年生クラスでは授業中の私語は少ないように感じます。

スマホを触っている学生にも注意はするのですが、止めるのはその時だけで、また触っています。これはなかなか解決できません。

以下は授業中の注意事項です。

- ① スマホは出席登録と指示されて検索する時のみ使用
- ② 飲食禁止、ただし必要な水分補給は許可
- ③ イヤホンは絶対禁止
- ④ 私物は机上に置かない
- ⑤ 私語は禁止
- ⑥ 他の学生に配慮する

あたりまえのことなのですが、静粛な授業環境を保持するために、学生には徹底して注意しています。

6 おわりに

学生にとって90分間、授業に興味を持ち続けることは難しいと思いますが、私の課題として、学生が眠くならない授業を目指したいと考えています。それには、「3 授業の工夫」で紹介した「美味しい料理」を作るシェフのように、「興味を持てる授業内容」にすることが一番だと思います。

また、履修人数が多くなれば双方向授業は困難になります。学生に発言を求めることは難しいですが、できるだけ発言できるような機会を設け、学生自身が授業に参加している意識を持てる授業にすることも課題です。目標は「座学からの脱却」です。

私自身が教育ツールを十分に使いこなせていない点も課題です。正直なところ、manabaの機能は十分使いこなせておりません。これは喫緊の課題だと自覚しております。

試行錯誤しながら毎年授業を行っていますが、自己満足に陥らないためにも、このような公開授業や意見交換会は必要不可欠だと思います。貴重なコメントをいただき、ありがとうございました。

「地誌学」

西岡 尚也

(公共学部公共学科 嘱託教授)

1 はじめに

私は現在、「地理学Ⅰ・Ⅱ」「地誌学」「社会地歴科教育法」「社会科概説」及び「ゼミ(3・4年)」を担当しています。一般教養科目と教職課程科目の授業をしていて、年間を通せば延べ人数で500名以上の履修学生と接する機会があります。毎年さまざまなタイプの学生に「教える」ことは、教員の私にとっての「楽しみ」になっています。なぜなら、私の場合は逆に学生から「教えられる」ことが多く、授業は「新しい発見」と学生との出会いの機会になっているからです。高校教員の経験から、大学においても一番大切にしなければならないのは「学生とのふれあい」であると考えています。

2 授業の概要

今回の公開授業の「地誌学」は、社会科教員免許必修科目(通年4単位)であり、受講生の学習意欲は高いといえます。しかも比較的少人数(毎年25~30人程度)なので、全員と相互のコミュニケーションがとりやすい科目になっています。

年間シラバスは、前期は「日本地誌」、後期は「世界地誌」に分割しています。前期15回分の授業内容・テーマは4月にmanabaで公開し、学生は事前に「予習」をしてから授業に参加することになっています。

今回の公開授業は、「日本地誌」のテーマ「北海道地方」の一部になっています。4月より授業で日本全国(地方・都道府県)を一巡して、北海道は最後の地方です。北海道地方は90分×3回の授業計画で、本時はその2回目の「北海道の歴史とアイヌ民族の文化」が内容・テーマになります。

授業90分の前半は、2020年に誕生した「ウポポイ(国立アイヌ民族博物館)」を紹介しつつ、ウポポイが提供している動画の一部を視聴してもらいました。その後、縄文~明治期の日本(本州島)と北海道島の関係を簡潔にたどる説明を行いました。その際には、本授業の教科書である「中学校社会科地図」¹144頁の⑥「開拓の歴史とアイヌ語地名」の地図を参照し、具体例として「アイヌ語由来の地名」が多く存在することを確認しながら補足しました。

日本政府は明治以来、アイヌ民族を先住民として認めず、差別的な政策を続けてきましたが、ようやく2008年6月に国会で「アイヌ民族を先住民とすることを求める決議」が採択されました。この採択は、1か月後の7月の洞爺湖G8サミットに急遽間に合わせたものでした。北海道が海外から注目されるので、これまでの方針への批判を薄めるための決議でした。皮肉にもG8サミットの開催がきっかけで、ウポポイの誕生につながったことになります。また、漫画と映画の「ゴールデンカムイ」も併せて紹介しました。

このように、「北海道の歴史とアイヌ民族の文化」については、社会科教員になった後も問題意識を持ち続け、授業ができるようになってほしいと考えています。

¹ 帝国書院編集部(編)(2023). 中学校社会科地図 帝国書院

3 授業で工夫、苦心していること

3.1 授業のテーマ・課題の板書

私は授業開始 10 分前には教室に入室し、その時間のテーマと課題（シラバスにも掲載済みである課題 2 つ）を板書するようにしています。これは、毎回、その 2 つの課題の説明に集中し、散漫な内容にしないという私自身への戒めにもなっています。

授業冒頭の 5～10 分間は、学生に各自で調べた「今週のニュース」を報告（発表）してもらい、「最新の世の中の動き」を共有するよう工夫しています。社会科教員にとってニュースに関心を持つことは必須事項であり、「各自の関心のあるニュース発表」を通して「広い視野を持ち、現代世界を見る目」を身につけてほしいと考えています。



3.2 冊子レポートの使用

前期と後期の最初の授業において、15 回分の授業を記録するための冊子を配布しています。毎回の授業を A4 用紙 1 ページに記録してもらうためです。これを各自がホッチキスで閉じて冊子にして、毎回、授業に持参するように指導します。さらに、「地誌学」の基本である「ニュースの場所」を地図帳で確認する作業、「手描き地図で描く」という課題を宿題にしています。

なお、この冊子は第 15 回授業終了時に提出してもらいます。まじめに取り組み提出した者には、評価でプラスしています。ただし未提出でも減点にはしていません。

過去には学生にノートの購入を促し、授業を記録するように指導していましたが、綴じたノートを嫌う者やルーズリーフ式のノートしか持たない者が大部分でした。「学生が購入しないのなら、こちらからノート用の冊子を全員に配布する」という方法に切り替えました。まじめに取り組む学生からは、「自習の習慣化のきっかけとなった」「ニュースに関心を持てるようになった」と好評を得ています。

3.3 manaba の活用

manaba を活用して、事前に 15 回の授業のテーマ・課題・ポイントを明らかにしています。そうすることで、「何をすればよいのかわからない」という学生に対して、学生自らが主体的に学ぶ「予習」「復習」の機会を与える効果がみられています。また、学生が授業を欠席した場合は、「遅れた分を取りもどす」ことができるように、教室での授業内容と manaba の内容を「並行して連携する」ように工夫をしています。

「学生からのフィードバック」には、manaba の「コメントの記入」を用いています。毎回の授業内容の感想や意見を 200 字程度で記入してもらい、投稿することを義務づけています。これによる効果や利点は、「他の受講生」の感想や意見が閲覧できることです。学生がお互いの考えや意見をふり返ることができています。そして、私にとっても「受講生の反応確認」の貴重な資料になっています。なお、授業を欠席した学生にもコメント記入を義務づけています。

4 公開授業参加者からの質問・コメントへの回答

<コメント1>

授業の冒頭で学生にニュースについて発表させることで、スムーズに内容に入っていく効果があったと思う。

<回答>

「ニュース発表」の効果を評価していただき感謝します。社会科教員は「教科書を解説し教える」だけでは不十分であり、日常の社会変化や世界の動きと授業をリンクさせる役割があると考え、授業の冒頭で「今週のニュース」を発表してもらい授業への導入としています。学生が将来、中学校や高校の教員になった際には、世の中に「アンテナ」を張りながら、「新鮮な社会の話題」を活用できる教員になってもらうためです。なお、前述の「冊子レポート」課題に自主的に取り組むことで、スムーズに授業に入っていけると思っています。授業冒頭の「ニュース発表」は今後も継続していきたいと思います。

<コメント2>

教職専用科目との線引きや工夫はどのようなになっているのか。

<回答>

「地誌学」は教職専用科目に含まれ、社会科免許科目では必修科目です。社会科免許科目は大きく3つの領域、①「地理的分野」、②「歴史的分野」、③「公民的分野」に分類されています。これでは、①「地誌学」は①の「地理的分野」に含まれます。社会科免許科目では、①以外にも②と③の関連科目を履修することになります。

①～③の分野は相互に関連した内容もあって、連携することもよく見られます。さらに、これらの社会科科目に加えて、教員免許取得には「教育法規」「教育原理」「教育心理」「教科教育法」「教育実習」などの関連教職専用科目の修得が課されています。

ご質問にあった、教職専用科目と関連科目との線引きには複雑な部分があります。この疑問に対応するために、本学では例年、教職志望の学生を対象に「オリエンテーション指導」が実施されています。オリエンテーションでは、「大阪商業大学教職課程ハンドブック」²を用いて、教職課程履修ルール、推奨科目、学部・学科コース別の教職課程履修モデル、教育実習などが丁寧に説明されています。教職志望の学生には「丁寧なオリエンテーション指導」が実施されています。

<コメント3>

YouTube等の映像コンテンツには根拠が不明なものがあるが、リテラシーについてはどのように指導しているのか。



² 大阪商業大学教務課作成・発行の「大阪商業大学教職課程ハンドブック」が、説明会参加者に配布され、詳細な科目履修指導が行われている。

<回答>

ご指摘のように、ネットで配信されている YouTube には、映像コンテンツや制作・意図などに不明なものがたくさんあり、そのことは学生にも徹底して注意喚起しています。映像のリテラシーについても、作者の主張や意向をそのまま鵜呑みにしてはいけないことを常に伝えてきました。「すべては疑いうる」を前提に資料の活用を指導しています。

授業で動画や YouTube を活用する際には、次の 3 つの点に着目して視聴する動画を選定しています。

- 1) 専門用語や概念の理解のために、映像は基本的に NHK 教育放送 (E-テレ) のものを活用しています。社会科地理教科書に準じた用語の意味を正しく伝えることが大切であると考えています。その意味からも、NHK 教育放送の映像を使用しています。
- 2) 前期の「日本地誌」では、NHK 取材班制作の 47 全国都道府県を紹介したシリーズ「見えるぞ日本」で過去に放送された番組を活用しています。後期の「世界地誌」では、NHK 通信高校「地理総合」「地理探究」で過去に放送された番組を活用しています。
- 3) ニュース・報道番組では、常に広い視点から、マスコミ報道を「大観」して授業に反映していく工夫をしています。NHK だけでなく民放や海外のニュースも使用してきました。中立な授業展開を心がけ、「反対側の視点・意見」もバランス良く紹介する工夫をしています。

5 おわりに

今回の公開授業は、本学では私にとって 3 回目でしたが、準備段階では内容や展開に「不安」があったものの、終了後には「達成感」がありました。そして、意見交換会ではコメントや質問を頂戴し、課題や新たな視点を得ることができました。

私は高校教員が長かったため、「公開授業」や「研究授業」はこれまでも数多く経験してきました。しかしながら、生徒や学生以外の先生方が参観されることには、今でも良い意味での緊張感を持つことができました。これは公開授業の「プラスの効果」だと思います。教員になった当時を思い出し、「初心忘れず」を再確認できました。

このような公開授業は小中高教員のみならず、大学教員にも大いに役立つと私は考えています。私の公開授業を参観し、意見交換会でコメントやご意見をいただいた皆様に感謝いたします。



「貿易論」

柴田 鎮毅

(経済学部経済学科 講師)

1 はじめに

2024 年 4 月より本学に着任し、「貿易論」「経済学特殊講義Ⅲ」「簿記論」などの科目を担当しています。日々、多くの先生方から貴重なアドバイスをいただき、講義をはじめ、多くの業務が円滑に遂行できていることに感謝しています。

今回の公開授業では、お忙しい中、先生方や担当職員の方々に参観していただきました。公開授業

を通して、自分の講義の運営について振り返る良い機会となりました。また、意見交換会では、多くの有意義なコメントをいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

2 講義の概要と公開授業での工夫

2.1 講義の概要

「貿易論」の授業は火曜 5 時限開講で、履修登録者は経済学科と商学科に所属する学生 38 名です。講義はパワーポイントで作成したスライドをスクリーンに投影して、その内容を解説する形で進めています。講義では、まず本時の内容を確認し、最後に振り返りを行うように心がけています。学生が講義で学んだ知識を確認・整理・表現するために、小テストと「思考ツール」も活用しています。

「貿易論」では、国際収支、貿易実務、国際貿易体制、地域経済統合など、幅広い内容を学習することになります。貿易は身近な話題です。しかし、ミクロ経済学の知識が不十分な学生にとっては内容が「難しい」と感じる可能性があります。そのため、学生がミクロ経済学を知らないことを前提として、貿易理論を学ぶために必要と考えられる余剰分析などの復習を行っています。

学生が学習するインセンティブ（誘因）は、「単位をとるため」だけではありません。私はそのインセンティブを「興味がある」「わかる（わかった）」「自分に関係がある」と考えています。そのため、この3つを講義のキーワードとしています。

内容に興味を持ってもらうために、その時間の授業内容に関連するニュースを提示しています。内容を「わかった」と思ってもらうために、なるべく学生に関心がありそうな話題を出すように心がけています。また、繰り返し説明したり、写真や図、動画も活用したりしています。例えば、日常生活では馴染みがない「コンテナヤード」（コンテナを搬入して蔵置や保管したり、コンテナを受け渡したりする場所）などの用語は、言葉で説明するとともに、図や写真を見せることで学生の理解を深め、記憶に残るようにしています。

2.2 公開授業での工夫

今回の公開授業のテーマは「地域経済統合について」でした。1990 年代以降、RTA（地域貿易協定）の数は増加の一途を辿っています。日本でも FTA（自由貿易協定）の要素に加え、貿易以外の分野（例えば、知的財産権の保護）を含めて締結される包括的な協定である EPA（経済連携協定）を進める通商戦略を行っています。



今回のテーマは、WTO（世界貿易機関）の「原則」と「例外」を理解するには絶好の内容でした。また、RTA は「国際経済学」などでも学ぶ可能性があり、教科等横断的な内容と考えられます。それでは以下、公開授業で工夫した点を 4 つにまとめて述べていきます。

まず、前回の講義の復習を簡単に行い、その後、本時の講義内容のポイント（学習目標）を明確にしました。本時の目標を明確にすることは、学生が「何を学ぶ



のか」がわかり、学習に対するモチベーションを高めることとなります。また、本学の建学の理念を支える4つの柱の1つである「思いやりと礼節」の育成を意識して、携帯電話を片付けるなどのルールを伝え、学習環境を整えた後に講義を開始しました。

次が書画カメラの活用です。具体的には、部分均衡分析の図を書画カメラで映し出して描きながら、FTAの経済効果である貿易創出効果と貿易転換効果を説

明しました。学生もカメラを見ながらプリントに図を描いていきます。この講義でせっかく貿易理論を学ぶために必要な分析ツールを復習したものの、それを活用しないでいると忘れていきます。これも「わかる」講義に向けた工夫だと考えています。

そして「思考ツール」の活用です。毎回の講義でツールが使用できるわけではありませんが、今回は物事を多面的に見て、意思決定をする際に役立つPMI（PはPlus、MはMinus、IはInterest）チャートを使用しました。学生はFTAのプラス面やマイナス面を客観的に判断してシートに記入します。「Interest（興味）」の欄にはFTAに期待することを書くこととなります。「思考ツール」は「考えるための技法」として、その活用の意義などが文部科学省の「高等学校学習指導要領解説」³の95～98頁に記載されています。他の講義では、アイデアの整理と拡大に有効な「マンダラチャート」を利用しました。ちなみに、「マンダラチャート」は、大谷翔平選手が高校時代に作成したという話を学生に伝えています。

最後が動画の活用です。動画は音声と映像により、学生の印象に残りやすい有効なツールです。TPP（環太平洋パートナーシップ）協定によって関税が撤廃され、安価な商品が輸入されることは、「私たちの生活にどのような影響があるのか」「日本は何を守ろうとしているのか」などを考える「きっかけ」になったと思います。（動画の時間が長いと学生の集中力が続きません。そのため、長くても動画の視聴時間は5分をめどにしています。）

今回の講義には関係ありませんが、小テストの実施が学生の「やる気」に貢献していると考えています。「貿易論」では3回、講義中に小テストを実施しました。毎回、採点を行い、学生に返却しています。自分が講義内容をどのくらい理解しているのか。前期定期試験でどのくらい努力すればいいのか。これらを「見える化」してくれていると思っています。

3 今後の課題と今後に向けて

意見交換会及び公開授業アンケートでは、貴重なご意見やご指摘をいただくことができました。例えば、FTAやEPAについては、「新聞記事なども使って具体的な品目の話などをしてもらえれば、もっと分かりやすくなるのではないか」というご提案をいただきました。また、動画については、流すまでに時間がかかったため、「manabaの授業ページに掲載しておけば、そこからアクセスでき、学生も振り返って視聴ができるのではないか」というご助言をいただきました。今後も、学生がさ

³ 文部科学省（2019）. 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探求の時間編 学校図書

まざま角度から理解を深めることができるように、動画や新聞記事、そして manaba の有効活用を考えていきたいと思います。

チョークの使い方についても、「板書する箇所と重要文言が同じ色（赤）だったので、色を変えてもらうとより分かりやすくなると思いました」というご指摘をいただきました。このご指摘は、チョークの効果的な使用方法を改めて確認する「きっかけ」になりました。今後は、白と黄色チョークを中心に使用するとともに、重要な箇所は「大きく板書する」などの工夫も加えたいと思います。

講義で使用するパワーポイントのスライド画面には、学生が配布されたレジュメに記入する箇所を示すために、「NOTE BOOK」と書かれたアイコンをつけていました。これは、学生が効率よく要点のみを書くことができるための工夫です。この工夫については、公開授業アンケートで、「示されていたのはとても分かりやすかったです」というご意見をいただきました。

公開授業の期間中は、時間の許す限り、他の先生の講義を拝見させていただきました。自分の講義に取り入れられることは積極的に取り入れていきたいと考えています。学生が貿易の基礎理論と経済学的な分析に、「興味を持った」「わかった」「ニュースの内容が理解できるようになった」と思ってくれるように、今後も研鑽に励んでいきます。



「経営情報処理論 A-I」

小林 俊和

（公共学部公共学科 講師）

1 はじめに ー担当科目と授業の目的ー

公開授業では「経営情報処理論 A-I」を担当いたしました。本科目は総合経営学部経営学科主専攻・専門科目で、2年次配当科目です。また、講義形式で授業を行っています。

本科目では、経営活動を行う中で得られる情報を深めることや情報の価値を高めるための「処理」について学ぶことを目的としています。具体的には、受講生が経営者の立場になることを想定し、①複数の選択肢の中から最も合理的な意思決定を行うための手法とは何か、そして②どのような処理法が考案されているのかについて学びます。さらに、③演習課題に取り組み、具体的に処理法を体験できるようにしています。

2 授業の運営計画

上記①～③のテーマに基づいた内容を学習するため、前期15回の授業を3部構成にしています。

「情報処理の知識」編は1部、続く「意思決定法」編は2部から成る3部構成です。今回の公開授業は、第3部にあたる意思決定法（AHP）について学習する回となりました。AHPについては授業5回分を充て、ゆっくり時間をとりながら学べるように計画しています。公開授業では、その5回目の授業を参観していただきました。

AHPの学習では、複数の選択肢を評価し合理的な意思決定を行うための手法を学ぶのですが、あまり詰め込みすぎず、かつ具体的な素材を活用するように心がけています。今回は「私にもっとも合うアルバイト先選び」を素材にしました。まず、複数のアルバイト先（塾講師、コンビニの店員、居酒屋の店員）を候補として設定し、その中から「私に一番合うアルバイト先」を選ぶための基準（やりがい、収入、距離）を置きます。そして、人間の気持ち（各アルバイト先についての評価）

という抽象的なものをデータ化する処理法などを学び、「私に一番合う選択肢」を選び出すまでを 5 回に分けて順に学習していきます。

各授業の進行は、冒頭に「前回の学習内容の復習」をし、次に「今日の学習内容の解説」、そして残った時間で課題を提示し「実習に取り組む」という 3 部構成で行っています。例えば、今回の公開授業では、アルバイト先についての評価（気持ち）を数値化するための処理法を



解説し、その後の実習時間では、数値化した気持ちを処理して計算するように求めました。このように、実習時間を授業中に設けて、学んだ内容を躍動的に理解することを促しています。また、実習に取り組みやすいようにワークシートを用意し、ワークシートの完成度から「今日の学習内容の解説」で聴いたレクチャーについての学生の理解度を把握できるようにしています。

3 複数回に分けて理解することの利点と難点

今回の公開授業で取り上げた AHP であれば、5 回分の授業を受けることでやっと 1 つのテーマが理解できることとなります。このような長丁場の学習計画を考えるようになったのは、前期中に就職活動が活発になり、毎回の授業に参加できない学生の対応について考えたことがきっかけでした。

授業に毎回参加できない学生にも理解できるようにすることと、複数回に及ぶ授業で学んで理解できるようになる授業計画を立てることは、一見矛盾しているかのように思えるかもしれませんが、しかし、もし学生が 1 回欠席しても、次の授業に出席できれば休んだ回の解説を聴くことができ、今回の学習内容と前回の内容との連続性も把握できます。さらに、その場で質問もできます。そのような形の授業にすると、欠席をきっかけに受講を諦める学生を減らせるのではないかと考えました。

このような企画が受講を諦める学生を減らすことにつながっているのかどうかについては、まだ明らかではありません。今後の教育研究の中で解明していきたいと思っています。しかし、私が意図していなかった反応を学生から得ることにはつながりました。この企画を始めた当初は、このような授業運営は受講生にとって面倒なのではないか、もっと展開の早い授業を求めるような批判的な反応が出るのではないかと危惧していました。しかし、そのような危惧とは裏腹に、「授業時間内でわかる」ことに満足している、という声を上げてくれる受講生が増えてきました。

本来であれば、わからない点は授業後に教員に質問をしてくれると良いのですが、ほとんどの学生はわからない点をそのまま放置してしまう傾向があるようです。この授業では復習に時間をかけ、実習では実際に手を動かして課題に取り組みます。その間、教員も教室内を巡回して学生に話しかけますので、学生も「理解した」と実感する機会が増えます。授業内での「わかる体験」が積み重なり、それが学生の満足につながったようです。

また、授業システムの manaba を利用したアンケートでは、「実習での取り組みは学んだことを自分で考えるための時間になっている」との意見も学生から寄せられました。さらに、「教員が壇上から降りて教室内を巡回し、学生に近いところで説明をする方法は、理解を深める機会になっている」



という声を寄せてくれた学生（授業後に教壇に駆け寄り質問することに躊躇している学生であろうと推測しますが）もいました。

このような授業スタイルは教員にとっても利点があります。講義科目では受講生の理解状況をその都度把握しながら進行することはなかなか難しいですが、実習中に担当者が積極的に教室内を巡回し、困っている受講生を見つけて解説するようにしていると、学生の理解状況

を個別に把握できるとともに、全体にも随時補足説明を加えることが可能になりました。

以上のように、学生からはポジティブな反応がある一方で、公開授業にご参加いただいた先生からは、「学生に計算をさせる取り組みの際に、計算に手間取っている学生への個別指導に時間がかかると、他の受講生への対応に濃淡がおきてしまうのではないか」といったコメントを頂戴しました。その点については、私も非常に気になっています。

例年に比べて今年は受講生が少なかったこともあり、個別指導に偏っているところがあったと思います。受講者数の多い年には、学生が友人同士で固まって着席している場合、その内の1人に積極的に解説し、理解したことを他のメンバーに教えてあげるように伝える、という対応をしたこともありました。実習時間中の指導体制については、来年度以降も継続して改善方法を考えていく必要があると思います。ご指摘いただき誠にありがとうございました。

4 おわりに

以前にFD委員の先生から、「授業運営について何かコメントはないか、と毎週のように受講生に尋ねている」とのお話を伺ったことがあります。私もその姿勢から学ぼうと、受講生には各テーマが終わるごとにmanabaを通してアンケートに回答してもらいました。アンケートの内容は、「興味が持てるテーマだったか」「理解したと思うか」「ゆっくりとしたペースで授業を進行しているが、理解に役立ったか」の3つの質問項目に自由記述欄を加えたものです。

AHPを理解するために、5回のステップにわけて学習してきました。
毎回の授業の冒頭で「先週までのステップの説明」をし、
次に、「今日のステップの解説と実習」を行ってきました。
少しゆっくりとしたペースで授業を進行することになりましたが、
あなたの理解(わかりやすさ)に役立ちましたか？



図1 授業運営・進行についての評価

「AHP(一対比較評価法)による意思決定」は、理解できたと思いますか？

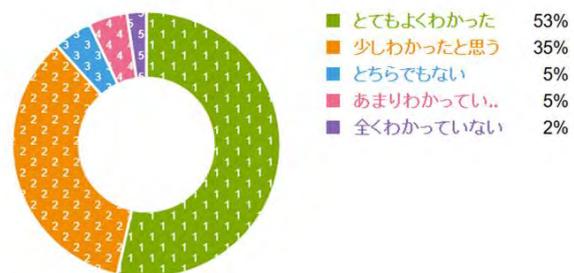


図2 学習内容の理解についての自己評価

AHP をテーマとした一連の学習を終えた際にもアンケートを実施しました。アンケート結果では、84%の学生が「この授業形式が理解に役立っている」と回答しました（前頁図 1 参照）。特に、「理解したと思うか」については 88%の学生が肯定的な回答をし、学生の自己評価が高いことも明らかになりました（前頁図 2 参照）。この結果を励みに、今後も学生との対話を大切に、授業改善を継続していくことで、より良い学習環境の提供を目指したいと思います。

最後になりましたが、公開授業を行う機会を与えてくださいました FD 委員会及び委員の皆様、そして公開授業や意見交換への参加等に貴重なお時間を割いてくださいました諸先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。



「商法（商取引法Ⅰ）」

荒井 太郎

（総合経営学部商学科 特任教授）

1 担当教員のプロフィール

2024 年 4 月に本学に着任し、「商法（商取引法Ⅰ）」「商法（商取引法Ⅱ）」「企業法（組織法）」「企業法（行為法）」「商法（会社総論）」「商法（会社各論）」「ゼミナールⅡ」「ゼミナールⅢ」を担当しています。商社法務部での 33 年間の企業法務の実務経験、及び前任校での 7 年間の「企業法」「国際取引法」などの教員経験を活かして、実践的な法律の授業を目指しています。

2 公開授業科目の概要

公開授業科目の「商法（商取引法Ⅰ）」は、「商取引と関連する法律の基礎を学習する」ために開講されている科目です。本授業では、商取引法の基本である売買契約に関する知識を習得するために、受講生が売買基本契約書ドラフトを作成します。下記の課題について、「講義 → 取引先の工場見学（オンライン） → 取引リスクの検討 → 契約ドラフトの作成 → 作成した契約ドラフトの提出」の順で 15 回の授業を行います。

2.1 課題

受講生が、総合商社の双日株式会社（本社：東京都千代田区）[売主]の食料事業部の担当者という立場で、ハウス食品株式会社（本社：大阪府東大阪市）[買主]に、インドから輸入するレトルトカレー用スパイスを販売する売買取引における売買基本契約書ドラフトを作成する。

2.2 授業の流れ

① 講義

商取引法及び売買契約の概要、売買基本契約書の条項、ハウス食品の企業研究、本件取引のリスク分析、リスクの対応方法などについて講義を行う。

② 取引先の工場見学

オンラインでハウス食品の静岡工場を見学し、担当者の方から取引ルート、工程管理、品質管理、ハウス食品の企業内容等の説明を聞く。

③ 取引リスクの検討

納入する商品の品質保証、ハウス食品の製品の消費者に対する責任、取引に内在するリスク、代金回収に関するリスク等を検討の上、契約上の対応策について講義を行う。

④ 契約ドラフトの作成と提出

売買基本契約書ひな形をベースにして契約ドラフトを作成し、その契約ドラフトを提出する。

⑤ 講評

担当教員が提出された契約ドラフトを講評する。

⑥ 成績評価

提出された契約ドラフトを成績評価する。(配点 40 点 ; 定期試験の配点 60 点)

3 授業運営において工夫している点とその成果

3.1 工夫している点

授業では、受講生が次のことを習得できるように工夫しています。

● 実践的な商取引法を理解できる

売買契約書には商取引に関する多くの法律問題が含まれているので、売買契約を作成することによって商取引法の基礎知識が習得できる。売買契約における商品の引渡、検収、品質保証、代金回収、契約解除、損害賠償、紛争解決などの条項を通じて、商取引に関連する法律が学習できる。また、買主が本学に隣接するハウス食品であり、販売する商品(カレー用スパイス)や製造する製品(ハウスのレトルトカレー)も日頃からなじみ深いものなので、難解な法律問題について親近感を持って考えることができる。

売買取引に関連した売買契約法、会社法、運送契約法、保険契約法、不動産登記法、倒産法、紛争解決法などの法律問題を売買基本契約の作成を通じて学習することができる。

● 取引に内在するリスクを分析できる

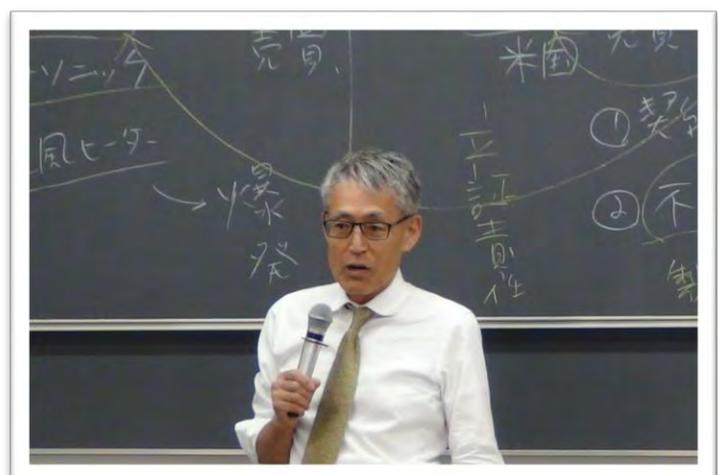
「インドの生産者 → インドの輸出業者 → 双日(わが社) → ハウス食品 → 流通業者 → 消費者」という取引ルートにおいて、わが社にはどのようなリスクが存在するのか、例えば商品の納入・品質に関するリスク、消費者に対するリスク、代金回収に関するリスク、紛争解決に関するリスクなどを分析することができる。

● リスクへの対応方法を検討できる

上述の取引に内在するリスクが顕在化した場合にどのように対応すべきか、という問題を検討し、その対応策を踏まえた契約書を作成することができる。

● 相手方との利害対立を調整できる

売主の立場で契約ドラフトを作成するので、買主には不利な条件の契約ドラ



フトになる。また、作成した契約ドラフトを買主（ハウス食品）に提示後、契約交渉において条件交渉が難航することが予想される。契約交渉における利害対立をどのように調整し、売主と買主が互いに利益を得ることができる取引を作り上げていくのか、受講生が売主と買主の立場に立ち、利害調整する方法を考えることができる。



● 紛争が発生した場合に解決できる

商品の納入問題、品質問題、代金回収問題などが発生した場合、契約上売主としてどのような権利が主張できるのか、買主が売主の要求に応じない場合にどのような解決手段が考えられるのかといった点について、契約書のそれぞれの条文を利用して売主に有利に解決できる方法を考えることができる。

3.2 成果

提出された売買契約書ドラフトや前期定期試験を採点して、受講生が売買基本契約のコアなポイントを理解できていることが認識できました。例えば、「期限の利益の喪失条項」をどのような状況で利用するのかという点や、取引先の信用不安状態が発生した場合にどのような対応をすれば良いのかという点について、売買基本契約条項の一連の流れに応じた対応策についての基礎知識と考え方が習得できたのではないかと思います。

4 今後の計画

後期に開講する「商法（商取引法Ⅱ）」では、前期の授業で習得した売買契約に関する基礎知識や債権管理に関する考え方をベースにして、売買取引における緊急時の債権回収や紛争解決についての授業を行っていきたいと考えています。

5 公開授業に関する質問

公開授業を参観された先生からいただいたご質問にお答えしたいと思います。

<質問>

講義中は静謐な状態が保たれている点が特徴的でした。講義は静かに受けるよう学生に何か指導をしていらっしゃるのでしょうか？もしそうであれば、その方法について教えていただきたいです。

<回答>

受講生が興味を持てる内容の授業を心がけています。受講生が将来社会で活用できるような課題を選び、作成した成果物を成績評価の対象にすることで、授業に真剣に取り組めるように努めています。

「一般経済史Ⅰ」

伊藤 敏雄

(経済学部経済学科 准教授)

1 はじめに

今回、公開授業の対象となったのは、1年生向けの「一般経済史Ⅰ」(水曜・2限、履修者数82名)である。本科目では、経済史の方法(理論)を踏まえ、主に欧米の古代・中世から産業革命期までの歴史を取り扱い、近代資本主義社会の成立について学習する。公開授業のテーマは「産業革命の開始(イギリス産業革命)」であり、主に産業革命の評価について講義した。

2 授業運営において工夫している点

2.1 授業資料の作成

本科目は欧米の経済史を扱うため、高校時代に世界史を選択していた学生とそうでなかった学生とで理解度に大きな差がある。また、教職志望者に対しては相当量の知識の提供も必要になる。さらに、今年度から教科書が指定されたが、それを購入し持参しているのだから、一字一句読み進めていくようなスタイルの授業を希望するという学生も存在する。

そのため、本科目では、教科書の内容に基づいた詳しい資料をパワーポイントで作成して事前にmanabaで公開し、予習することを促している。その際、重要な部分は赤字、それと関連する部分は青字と、2色程度のシンプルな色分けにして、世界史選択でなかった学生でも、それらを中心に目を通せば概要を把握できるように工夫している。また、同資料では、「補足」として、指定の教科書では取り上げられていない高校の世界史の内容や、さらに学びたい学生のための発展的内容も掲載し、より深い理解につながるように心がけている。

そして、同資料の最後には穴埋めの練習問題を掲載して復習に供している。これも授業内容の概要が把握しやすいように、問題文は簡潔な文章で箇条書きにし、容易に「振り返り」を行えるようにしている。実際に練習問題に取り組んでもらうために、これらは定期試験に出題することとし、日頃から学習しておくように伝えている。

2.2 授業内容の説明と小レポート作成

対面での授業内容の説明では、歴史的事項の羅列に終わらないように、おおよそ次のようなことに重点を置いている。第1に、何を学ぶのかという問題意識を明確にする。第2に、授業内容(資料)の構成がどのようになっているかを明らかにする。第3に、何がどのように変容したのかを簡潔に示す。

これを踏まえ、毎回、授業中に小レポートの作成を行っている。その際、テーマを絞らず、当日の授業内容に関して何が重要であるかを各人が考えて決め、それに対するコメントを用紙に記入(コピペを防ぐため手書き)してもらっている。これは、各人の独創性を引き出し伸ばすことを目的としているためである。また、質問や感想があれば、それらも同用紙に書いてもらうことで理解度を測っている。そして、質問の答えのほか、特徴的な意見や誤った理解などがあれば、それらもフィードバックとして次回以降の授業で取り上げている。

3 意見交換会及び公開授業アンケートにおけるコメントに対する回答

意見交換会及び公開授業アンケートにおいては数多くのコメントを頂戴したが、以下では主に授業改善に関わる部分を取り上げ、それに対する回答を示したい。

<コメント1>

学生はほとんどメモもノートも取っておらず、受動的な印象を受けた。manabaなどで学生に課題を出し、授業内で考えさせて記入させる時間などを挟むと単調にならないかもしれない。学生の私語や居眠りは少ないので話は聴いているようである。

<回答>

今後は、メモ等を取って積極的に授業参加するように繰り返し呼びかけるとともに、授業内容の重要な点は口頭で明確に伝えることにも注意したい。また、アドバイスをもとに、授業内に考えて書く時間もつくり、暗記中心の授業にならないように努める所存である。授業は聴いているとのことであるが、前述した小レポートの提出がこれにいくらかは関係しているかもしれないと考えている。

<コメント2>

1年生必修の基礎科目であるため、学生との対話も少し交えてはどうかと感じた。歴史を見つめ直すことで経済社会に対する理解を深めてもらう科目であるが、解説だけでなく、自ら気づく機会の提供も重要のように思った。

<回答>

ご指摘を受け、早急に授業の改善を行いたく考えている。また、これに関連して、「前方で講義をしているので、学生との距離感が遠いのではないか」というコメントもあった。当初は教室内を巡回して対話も試みていたが、返答等もないため、講義形式を中心に授業を進めることとした（ただし、その後も対話形式をまったく行っていないわけではない）。これには、教科書の難しい部分をもっと説明してほしいという要望に対応する側面もあった。今後は学生に向けての質問内容も再考し、歴史的事例の中から経済学的な問題を投げかけるとともに、対話と解説のバランスを考え、主体的な学びにつなげていきたい。



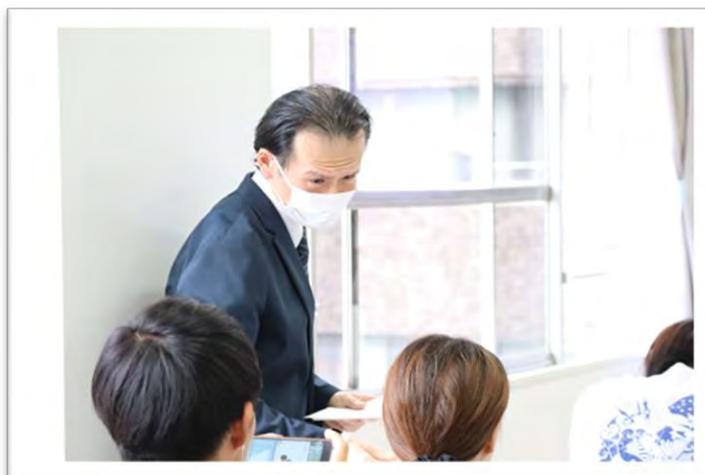
<コメント3>

講義中、学生は私語をせず、静かに聞いている。もっとも携帯は触っていたようだが、学生が静かに聞くような、特別の工夫や説明をしているのか。

<回答>

特別の工夫等はしておらず、受講生には、静かにするように言うだけでなく、周囲に授業を静かに受けてほしい学生が多くいることを意識するようにと繰り返し述べている程度である。加えて、教室内を巡回し、私語をしている学生に直接注意したり、質問への回答を促したりしているうちに私語

が減少していったと感じている。その際、丁寧な言葉遣いをするように気をつけている。また、学生が携帯を触っていたとのことであるが、manaba 上の授業資料を見ているのではない場合については、今後、より粘り強く注意していくことが必要と感じている。



<コメント 4>

資料の中で◎と○、△の区別はしているのか。大切なところが◎であれば、白黒印刷でも分かりやすいと感じた。

<回答>

資料を項目ごとに分割していくと見出し番号が多くなり複雑になるため、例えば4つの箇条書きの場合、冒頭に付ける番号1~4を順に、○、△、□、◇で表すなどしている。◎は、それら4つの記号に先立つ重要な問題意識を表している。ただし、問題意識はすでに明示している場合が多いため、使用頻度の低い◎は一般的に使わないとし、強調が必要なきのみ示している。ご指摘から、記号にもっと意味を持たせるとより分かりやすい資料になると気づき、大変参考になった。

<コメント 5>

出席確認は講義開始後30分経過後に実施、コメント用紙も配布（手渡し）。途中退席対応のように推察するが、出席確認時刻を予想して途中入室する学生も見られた。

<回答>

途中退席への有効な対策は打ち出せていないが、コメント用紙目当てに30分ぎりぎりに入室する学生は少なく、常習者もないので、当面はこのまま継続していきたいと考えている。本科目の出席率は61.0%~86.6%、木曜3限に担当している同一科目（履修者数82名）の出席率は80.5%~97.6%であり、一定の比率は維持できていると思われる。また、用紙を手渡しする際、挨拶してくれる学生が多数おり、コミュニケーションの契機にもなっている。

この<コメント 5>に関連して、「コメント用紙の分析は行っているのか」というご質問もあった。これについては、現在のところ、学生の授業内容の理解度を主に経済学と歴史学の観点から分析しているが、経済学という観点から見ると、経済成長理論などはまだ学習していないように考えている。それら未習分野については、フィードバックとして補足説明を行う、あるいは授業資料に解説を付けるなどして対応している。

<コメント 6>

講義の内容はレベルが高く、学生の理解度をどのように把握して授業をしているのか気になった。講義の最後に配布された「振り返り」が効果的な方法なのかとも思う。

<回答>

前述のように、毎回の授業内容に関する小レポートで理解度を把握するように努めている。講義を十分に理解できなかった場合は、まず復習用の練習問題で簡潔にポイントをつかむように伝えて

いる。今後は、ご指摘のとおり、この練習問題を次回の授業でも「振り返り」に活用するなどして、講義内容の理解度を高めることに取り組んでいきたい。

<コメント7>

常に問題意識（産業革命は革命なのか？）を学生に投げかけ、講義を展開していた。問題意識をもって講義に参加する大切さや論文を書く時のポイントを育成していると思った。

<回答>

過大な評価を賜り、ありがたく思うとともに恐縮する次第である。毎回の講義で、また複数のテーマを扱う場合においても、そのようにできるように努めたい。

以上のほか、manabaでの質問対応、携帯での出席の取り方、写真の使用、ノイズ音を意識したマイク調整などについてもアドバイスをいただいた。これらの点にも注意したい。

4 おわりに

今回の公開授業及び意見交換会において、先生方・職員の皆様には、ご多忙のところご参加いただくとともに数多くのアドバイス等を賜り、心より感謝申し上げます。貴重なご指導をもとに授業改善に取り組んでいきたく存じます。このたびは私の拙い授業にお付き合いいただき、誠にありがとうございました。



「経営学概論Ⅰ」

深沼 光

(総合経営学部経営学科 教授)

1 はじめに

2024年4月に本学に着任いたしました。今年度は、「経営学概論Ⅰ」のほか、「経営学概論Ⅱ」「OBP ビジネス企画論」「OBP ビジネス・インターンシップ」「OBP ゼミナールⅠ」「ゼミナールⅢ」を担当しています。前職は中小企業向けの政府系金融機関で、支店での融資・債権回収を担当したのち、本店の研究部門で中小企業経営、中小企業金融、新規開業などを研究してきました。また、大学・大学院での非常勤講師も多数行ってきました。

「経営学概論Ⅰ」は共通シラバスで、「株式会社について」「企業統治について」「企業の社会的責任について」の3つのセクションで構成されています。講義資料は新しく準備したものを使用しています。

2 授業で工夫している点

2.1 現実との接点作り

「経営学概論Ⅰ」は基礎科目であることから、暗記する必要がある内容も多いので、できるだけ学生の興味を引くように、実際の企業活動と結びつけて説明をするよう心がけています。例えば、株式会社についての講義では、大阪法務局がホームページで公表している株式会社登記簿謄本の見本を資料として使用し、商号、本店所在地、会社の目的、資本金の額、役員に関する事項など、会



社を登記する際に定めなければならない内容について、具体的にどのような記載がなされているのかを説明しました。企業統治の講義では、トヨタ自動車のホームページを閲覧しながら、法律で定められている以上の統治機構が設けられていること、創業家の豊田一族の持ち株比率が低いことなどを示しました。このほか、シラバスを逸脱しない範囲で、地域の商店街や町工場など、自身の専門である中小企業のことにも話すよう努めて

います。

公開授業の「企業の社会的責任（CSR）」に関する講義では、排気ガス規制前の霞がかかった幹線道路の写真、千里ニュータウンのトイレトペーパー騒動のニュース映像など、かつての日本の様子を見せることで、社会問題をより身近に感じてもらえるよう工夫しました。また、NTTや日本たばこのホームページから具体的なCSRへの取り組みについても紹介しました。

2.2 複数回にわたる復習

講義の内容は、シラバスに従って、「株式会社について」「企業統治について」「企業の社会的責任について」の3つのセクションに分かれています。セクションごとに小テストを実施しました。小テストの前にはそのセクションの復習を行って理解を深め、採点後には担当する2クラス分の問題と正答を公開して、そのポイントを説明しました。期末試験には小テストと類似する問題も出すことを学生に明示し、さらなる復習を促しました。小テストの結果から学生によって理解度に差が大きいことが分かったため、期末試験前にも全体の総復習を行いました。

2.3 大学に慣れてもらう

「経営学概論Ⅰ」は1年生前期の必須科目であることから、学生が大学生としてのスタートをうまく切れるよう工夫しています。最初の数回の授業ではエレベータトークを行いました。これは、エレベータに乗っている数十秒の間に、相手に自分の言いたいことを簡潔に説明する訓練です。授業では3人1組になって、順番に自己紹介を進めます。教室では同じ高校からの進学者が集まっている一方、1人で座っている学生も多数見られるので、この訓練が友達作りにも多少は役立っているかと思えます。

大学のシステムについても十分に理解してもらうように努めています。資料は授業支援システム **manaba** に掲示するため、初回授業で画面へのアクセス、コースニュース、コンテンツの確認、個別



指導(コレクション)の使用方法などについて説明しました。第1回小テストはあえて manaba を使ったオンラインテストにし、教室内で実施しました。まず練習用小テストを作成して、事前に試験画面へのアクセス方法、回答方法、提出方法のデモンストレーションを行い、実際に入力してシステムの操作に慣れてもらうようにしました。

また、重要な掲示などが掲載される大学ポータルサイト S-Navi の利用方法についても随時指導しました。特に期末試験の注意点については、1年生にとって初めての受験ということもあり、掲示版に案内があったものは授業においても注意喚起を促しました。実際、システムに慣れていない学生も多く、期末試験日程を把握していないケースも見られたため、事前にトラブルを回避できたのではないかと思います。

3 おわりに

公開授業後のフィードバックでのご指摘にもあったように、私語が多いのが悩みの種です。ほとんどの学生は講義を真面目に聞いており、話をしているのは全体のごく一部です。こうした学生は教室の後方に座ることが多いため、私も教壇にずっといるのではなく、クリッカーを使用するなどして、できるだけ教室内を巡回するようにしています。「もう少し厳しく指導してもよいのではないか」「手を動かす作業を取り入れたらどうか」とのコメントもいただきましたので、参考にしたいと思います。

今後はアクティブラーニング的な手法も取り入れながら、より良い授業になるよう工夫を続けたいと考えています。



「経営管理論Ⅰ」

浅井 希和子

(総合経営学部経営学科 助教)

1 はじめに

私が担当する科目は、金曜日1限の「経営管理論Ⅰ」である。この度の公開授業は、6月28日に行われた。

経営管理論は経営学の最も中心的かつ基盤となる理論であり、会計、財務、人事、マーケティング、生産、研究開発といった部門別の管理を束ねる土台となる科目である。しかし、大学生にとっては、「社長や経営者のためのノウハウ」や「管理職のための理論」といった印象が強く、簿記や情報、マーケティングなどの扱う対象が明確な科目に比べると、抽象的でわかりにくい。そのため、できるだけ具体的な事例や、普段の生活でかかわりの深い製品、サービスあるいはアルバイト経験などに結び付けて考え、理解できるようにすることを心掛けている。

2 経営学の成り立ちを理解する

「経営管理論」はⅠとⅡに分かれている。前期に開講されている「経営管理論Ⅰ」では、経営学という学問の成り立ちと現在の経営学へとつながる経緯を中心に講義している。

経営学は、その誕生から120年ほどの比較的新しい学問であり、20世紀に入り大企業が登場して



から発展してきた。この授業では、「なぜ経営学が今の社会に必要なのか?」「何のために経営学を学ぶのか?」という問いに立ち返って考えることで、経営学全般についての理解を深めることに主眼を置いている。そのため、やや学説史的な説明が多く、「古典的管理論」と呼ばれる、20世紀初頭から1960年代までに登場したオーソドックスな管理論が中心となっている。

しかし、だからといって「過去の遺物」ではない。むしろ、現在の企業経営に欠かせない普遍性のある理論が多い。これらの理論は、「人はなぜ働くのか?」という単純かつ根本的な「問い」を出発点としており、この「問い」は大学生にとっても決して他人事ではない。就職活動では、まさにそれが問われるからである。

3 モチベーションを管理（マネジメント）する

今回の公開授業の対象となったのは、経営学の中で常に重要なトピックの1つとなっている「モチベーション」である。「モチベーション」については、「人間はお金のために働く」というそれまでの常識が、ハーバード大学のメイヨーらの研究グループによって行われた「ホーソン実験」⁴によって覆されて以来、「モチベーション」は経営管理、特に組織管理の分野において常に中心となってきた研究テーマの1つである。そのため研究蓄積も多く、様々な考え方や理論があり、今日においても新しい理論が生まれ続けている。

一方で、「モチベーション」は学生にとっても身近で、普段から使っている言葉である。それゆえ、彼らにとって一見理解しやすい概念である。しかし、彼らが考える「モチベーション」といえば、「自分のモチベーション」であることが多い。体育会系のチームスポーツをしている学生は、声をかけあったりチームメンバーを助けたりした経験があるだろうが、そうでない学生の多くは「他人のモチベーション」を動かした経験が少ない。

経営管理論で扱う「モチベーション論」は、自分のモチベーションをコントロールするというよりも、他人のモチベーションをどうコントロールするかについての理論である。企業経営において重要なのは、「いかにして他人に効率よく仕事をしてもらい、高い成果を出せるか」ということであるから、当然のことといえるだろう。しかも、1対1の人間関係において相手のモチベーションを上げるだけでなく（この分野は「リーダーシップ理論」として別に発展している）、組織の仕組みとして従業員のモチベーションを上げるような制度を構築しなければならない。そのためには、人間のモチベーションの動きの法則性について、ある程度の定式化が必要になる。モチベーション論は

⁴ 1924年から1932年にかけて、ハーバード大学のメイヨー（Mayo）やレスリスバーガー（Roethlisberger）が、ピッツバーグ郊外のウェスタン・エレクトリック社のホーソン工場において、作業員の物的・人的環境条件の調整によって、作業能率がどのように促進されるのかを実験を通じて明らかにしようとした。これらの一連の実験をホーソン実験と呼ぶ。これらの実験の結果、人間が働くのは、経済的動機のみではなく、職場の人間関係や連帯感によっても動機づけられていることが示された。[出典：上野恭裕・馬場大治（編著）（2016）. 経営管理論 中央経済社]

こうした定式化の積み重ねであり、主に心理学や行動学といった他の学問領域の影響を受けながら発展してきた。

学生には、経営管理におけるモチベーション論は、特に仕事の場面において「他人のモチベーションをいかにコントロールするか」という問題であるということを理解させるとともに、「モチベーション」の心理学的なメカニズムをわかりやすく説明することを心掛けている。

4 双方向のコミュニケーションを取り入れる

経営学はそもそも実践の学問であり、現実の経営の現場で起こっている事象や企業行動を観察し、理論化し、それをまた経営の実践の場で試すことにより発展してきた。それゆえ、理論を講義や教科書で学んだとしても、それを実際の具体的な場面で問題解決に使うことができなければ意味がない。そのためには、理論を実際の場面に落とし込むことができるようになることが重要であるが、それには学生の授業への能動的な参加が必要になる。大人数の講義形式の授業では、少人数のゼミとは異なり、学生の能動的なかわりを授業内で実践することは難しいが、できるだけ学生自身が考えて、それを表現することができるような双方向のコミュニケーションを心掛けている。

5 公開授業を参観された先生方からのコメント

<コメント1>

リアルタイムでの Q&A と投票を実現することができるウェブ・アプリケーションの Slido を使用していたが、学生の回答への動機づけをどうしているのか気になった。回答データはエクスポートして残すことができると思うが、後でデータを利用して回答した学生に何か特典を与えるなどしているのか。

<回答>

最近の学生は、SNS の非対面形式なら意見を表出することにあまり抵抗を感じないせいか、スマートフォンで QR コードを読み取り参加するウェブ・アンケートだと多数の学生が参加する。また、その場で集計結果がプロジェクターに映し出され、他の学生がどんな意見を持っているのかを確認することができるため、興味を引かれるようである。私自身も、学生の反応をその場で確認することができるので、彼らが授業をどの程度理解しているのか、授業の内容に対してどんな感想や考えを持っているのかがわかり、授業を進める助けになっている。Slido の回答データを利用しての学生へのフィードバックについて、現時点はできていないが、今後は効果的な利用ができるか考えたい。

<コメント2>

PowerPoint の資料はすべて学生に公開されているのか。事前の配布資料には書かれていない内容がスライドでは映されていたようだ。

<回答>

配布資料は、重要な語句などを一部「穴あけ」した状態でアップロードしている。後日完成版をアップロードしないので、授業に出席しなければ穴あき部分



の解答は得られないが、内容は指定の教科書に沿っているので、教科書の該当部分を読めば自習で埋めることも可能である。授業を休むなどして穴あき部分を知りたい学生については、質問に来れば対応している。

<コメント3>

授業の最後で、学生に授業へのモチベーションを高めるための提案をさせていた。課題を解決するために習得した知識・技能を活用する発展的学習だと捉えたが、実際に授業内容を踏まえた提案をしている学生はどれくらいいるのか。回答させる際に、「提案内容+なぜそれが内発的動機づけにつながるのか」を答えさせる仕組みがあれば、より授業に即したものになるのではないかと。また、manaba のポートフォリオに提案を追加するように指示していたが、ポートフォリオを授業にどう活用しているのか。

<回答>

この授業では、毎回 manaba のレポート機能を使って、その日の授業で学んだことを自分の経験に照らして実際の場面にどう当てはめるか、また「問題解決」ができるか、ということをもとめるような課題を出している。できるだけ授業時間内にアウトプットしてもらうことで、学んだことを忘れないうちに整理して定着させるようにしている。

学生の多くは受動的に講義を聞くことに慣れているが、自分から意見を発表したり質問したりする機会や経験が乏しいため、自分の考えをアウトプットすることには慣れていない。そのため、10分や15分で考えをまとめて書くことが苦手な学生もいる。しかし、負荷をかけて行う取り組みを週に1回でもすることで、能動的に考える習慣を身につけてほしいと考えている。

授業の内容を理解して的確なレポートを書ける学生は多くはないが、中にはハッとするような意見やユニークな意見を書く学生もいて、私自身も良い学びになる。毎回のレポートは10点満点で採点して学生に公開しており、成績にも全体の10%の比重で加算している。また、面白いレポートは次の授業で紹介している。

公開授業回のレポートは、授業運営に対する不満がある学生が多いのか、かなり辛辣な意見もあり、大変参考になった。提案のベースになった理論を書かせることで、「なぜその提案なのか」という部分も説明されていたものが多かった。ただ授業に出席せずに manaba でレポートだけを書く学生が若干名おり、ChatGPT やネット記事のコピーと見られる回答も散見された。

<コメント4>

TED の動画を授業で視聴させていたが、このような授業と関連した動画や記事を見つけるコツがあるのか

<回答>

学問の領域にもよると思うが、TED はビジネスやリーダーシップなどに関するコンテンツが豊富なので、検索して探すと面白いものが見つかることがある。「日経ビジネス」や「週刊ダイヤモンド」の記事を検索することもある。

6 最後に

今回、公開授業を担当させていただき、多くの先生方から貴重なご意見を賜る機会を与えていただいたことに厚く感謝申し上げます。普段、自分のやっていることが学生にとって良いのか、また改

善するにはどうすれば良いのか、ということ自分なりに考えるが、他者の目から客観的に見て意見をいただくことはほとんどない。自分では気づいていなかったご指摘をいただき、授業を改善するうえで非常に参考になった。今後とも学生たちの成長に寄与できるように励んでいきたい。



2 授業アンケート

本学では、履修者の授業に対する認識や取り組み状況を把握し、担当教員が授業運営の点検・評価や改善の指標として活用することを目的に、学生を対象とした授業アンケートを年度ごとに実施している。以下は今年度の授業アンケートの実施概要である。

2.1 実施方法

今年度の授業アンケートは、前期及び後期授業期間の第14週 [2024年7月15日(月)～20日(土)、2025年1月6日(月)～11日(土)] に、出席確認システム Saai-MAS を利用して各対象科目の教室内で行われた。前期、後期ともに、第14週授業での実施が難しい場合は、予備日として設けられた翌週の第15週授業で行った。

2.2 対象科目

各教員の授業アンケートの対象科目は、原則として、演習科目及び体育系の実習科目を除く担当科目のうち、履修者数が最も多い科目となっている。履修者数や担当科目の変動によって、必ずしも毎回同じ科目が対象になるわけではない。このため、「同一科目の経年比較をしたい」「別の科目に関する学生の意識や反応を知りたい」など、教員の要望や判断により対象科目を変更することも可能である。

2.3 質問項目

昨年度から全面的に対面授業が開始されたことにより、授業アンケートの質問項目もオンライン授業対応のものから対面授業対応のものに戻った。昨年度と同様に、今年度の授業アンケートでは18の質問項目が用いられた(次頁<授業アンケートの内容>参照)。

2.4 教員からのフィードバック

授業アンケート結果に対するフィードバックとして、各教員は出席確認システム Saai-MAS から集計結果を確認したうえで、「感じた点や学生にフィードバックすべき点」と「学生の理解度を高めるために授業運営で工夫している点」について、「授業アンケートの振り返りシート」に自由記述形式で記入し提出することになっている。今年度の前期は2024年8月30日(金)に、後期は2025年2月28日(金)に提出期限が設けられた。

2.5 集計結果の開示方法

授業アンケートの集計結果は本学図書館で閲覧することができる。また、各教員による「振り返りシート」の記述内容の一部は、本学ホームページ上の本学のFD活動について紹介したページ(https://ouc.daishodai.ac.jp/profile/educational_research/fd/)において、「<参考資料> 学生の学びを支

援するための取組み紹介.pdf」(https://ouc.daishodai.ac.jp/uploads/284d21b6ea0106f74f0d39bfb2e0bf59_1.pdf) の<取組み例>として掲載されている。

<授業アンケートの内容>

授業アンケート質問項目

このアンケートは、授業について皆さんの意見を聞き、教員が授業をより充実させるために実施するものです。
 回答内容があなたの成績に影響することは一切ありませんので、率直な回答をお願いいたします。
 該当の項目にチェック☑して回答してください。

Q1 あなたの学年を選んでください。
 1年生 2年生 3年生 4年生 その他

Q2 あなたの学科を選んでください。
 経済学科 経営学科 商学科 公共学科 公共経営学科 その他

Q3 あなたはこの授業にどの程度出席していますか。
 全て 8割以上 6割以上 4割以上 4割未満

Q4～Q18の回答は、以下の基準にしたがって、あてはまる番号を1つ選んでチェック☑してください。				
1	2	3	4	5
全く そう思わない	あまり そう思わない	どちらとも いえない	ある程度 そう思う	強く そう思う

[1] 授業内容について	1:全くそう思わない 2:あまりそう思わない 3:どちらともいえぬ 4:ある程度そう思う 5:強くそう思う				
Q4 関心を持てる授業内容である。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q5 教員の授業内容の説明はわかりやすい。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q6 テキスト・板書・資料等が内容の理解に役立っている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q7 成績の評価方法が分かりやすく示されている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q8 この授業を受けて、自分が何を学ぶべきか明確になった。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q9 この授業を受けて、いろいろな視点から物事を見ることができるようになった。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
[2] 教員について	1:全くそう思わない 2:あまりそう思わない 3:どちらともいえぬ 4:ある程度そう思う 5:強くそう思う				
Q10 言葉が聞き取りやすい。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q11 熱意をもって授業をしている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q12 計画的に授業をしている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q13 静かな環境で学生が受講できるように配慮している。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
[3] あなた自身について	1:全くそう思わない 2:あまりそう思わない 3:どちらともいえぬ 4:ある程度そう思う 5:強くそう思う				
Q14 私語や居眠りなどをせずに授業に集中している。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q15 遅刻や途中退出をしていない。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q16 授業の内容が理解できている。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
Q17 授業時間外でも、この授業のための学習をした(予習・復習、課題の準備などを含む)。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
[4] 総合	1:全くそう思わない 2:あまりそう思わない 3:どちらともいえぬ 4:ある程度そう思う 5:強くそう思う				
Q18 総合的にみて、この授業に満足している。	<input type="checkbox"/> 1	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 5
[5] 自由記入欄 ※担当教員の指示に従って記入してください。					

ご協力ありがとうございました。



3 大学院 FD 活動

本学における大学院FD活動の一環として、修士論文中間報告会が2024年10月12日（土）に開催された。以下は、大学院・地域政策学研究科の宍戸邦章教授による報告である。

「2024年度修士論文中間報告会」開催される

宍戸 邦章

(大学院地域政策学研究科 教授)

大学院地域政策学研究科の「2024年度 修士論文中間報告会」が10月12日（土）10：00～14：00（6号館621教室）に開催されました。大学院地域政策学研究科は、経営革新専攻と地域経済政策専攻からなりますが、経営革新専攻からは3名、地域経済政策専攻からも3名が報告しました。発表時間は1人15分間で、報告後は約10分間の質疑応答が入ります。報告した大学院生の氏名、指導教員、論文題目は表1のとおりです。

表1 2024年度 修士論文中間報告会 論文題目一覧

<経営革新専攻> (司会：和田 伸介)

氏名	指導教員	論文題目
山田 杏実	西井 進剛	社会的企業におけるビジネスモデル構築プロセスに関する一考察
曹 悦	加藤 司	Eロコミが消費者の信頼性と消費者行動に与える影響
蔣 俊吉	孫 飛舟	電気自動車（EV）の普及に関わる国際比較 —イノベーター理論の視座から—

<地域経済政策専攻> (司会：宍戸 邦章)

氏名	指導教員	論文題目
塚田 耀大	石川 雄一	脱工業化の進展に伴う工業用地の土地利用変化に関する研究 —東大阪市とその周辺都市を事例として—
金 宸年	狭間 恵三子	大連市における近代歴史建築物の保護と活用に関する研究 —体験型観光の可能性に着目して—
重松 大晴	西嶋 淳	市交通の持続可能性に関する研究

この報告会は、当該年度に修士論文の提出を希望する院生が、論文の構成や内容等を報告し、さまざまな専門領域にわたる大学院担当教員から質問や助言を受けることを通して、各自の論文をより一層充実させることを期待して行われています。大学院に在籍して2年目の院生が主に報告していますが、1年目の院生も聴講しており、次年度の論文提出に向けた取り組みを点検する機会

ともなっています。この報告会は、院生の相互研鑽と研究能力の育成に資するものであると同時に、出席した他の教員による院生への質問や助言を通して、指導教員が論文指導能力をより向上させていくための大学院FD活動の一環でもあります。

<報告後の質疑応答の様子>



経営革新専攻 山田さん



地域経済政策専攻 塚田さん

いずれの報告に対してもフロアの教員から多くの質問や助言が寄せられ、報告会の時間が超過しました。教員からは主に次のような観点から質問や助言がなされます。

- ① 地域政策学研究科の修士論文に相応しい主題設定になっているか
- ② 研究の目的・成果が明確であるか
- ③ 先行研究を踏まえたオリジナル性の高い研究となっているか
- ④ 研究・分析方法の選択が妥当であるか
- ⑤ 論文構成や文章表現が適切であるか

各報告内容は先行研究の整理がなされ、事例研究や統計資料の分析に基づくものが多く、充実した内容でした。ただし、日本語での報告に慣れていない留学生にしばしば見受けられますが、PowerPointのスライド内に読み上げる文言をすべて記載してしまうことが気になりました。スライドはキーワードや簡潔な文章のみを表示し、読み上げる文章はスライドとは別に手元に置いておくなどが望ましいように思います。また、院生全体に言えますが、図表に多くの情報を詰め込み過ぎて、かえって読み取りにくくなっているスライドが散見されました。より効果的に相手に伝わるように情報の整理と取捨選択が必要ではないかと感じました。

院生の皆さんは、1月上旬に修士論文を完成させ、その後、副指導教員も含めた審査に臨みます。この報告会がよりよい修士論文の執筆に繋がる機会になることを願います。



大阪商業大学 FD ニュースレター 第 26 号

発行日 2025 年 3 月 20 日

発行 大阪商業大学 FD 委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町 4-1-10

TEL 06-6781-8816 FAX 06-6781-6156